

を悔いのないように頑張っていてほしいものです。先輩方の西武台バドミントンの栄光を目指し、継承して…。皆様ありがとうございました。そしてこれからも親子共々宜しく願いいたします。

#### 小山 文子(20期保護者)

西武台バドミントン部、創部二十周年おめでとうございます。

指導して頂いている先生方、支えて頂いている父兄の方々、二つあり有意義に使える体育館、こうした恵まれた環境で練習できることに感謝しております。

娘は、人見知りする子だと思っておりましたが、先日行われた餅つき大会の余興で、大勢の人の前で同級生三人と笑顔で踊る姿を見て、とても嬉しく、感激しました。成長した姿を見て、もっと自分を出せるようになってほしいと思いました。

酷いアレルギー体質に生まれ、喘息などに悩まされて、赤ちゃんの頃から体を鍛えてきました。水泳、体操、バドミントンと体力づくりに休まずやってきました。夏の暑い体育館でいっぱい汗をかき、アトピーも喘息も克服してきました。バドミントンを通して色々な経験をし、体だけではなく、心も大きく成長したと思います。周りの皆様に感謝し、本人の努力に励みます。

家族より長い時間をバドミントン部の仲間と過ごし、仲良く、思いやりの気持ちも感じられます。多くの先輩方、可愛い後輩の方々、そして幼い時からいつも一緒に練習してきた同級生たちに囲まれての部活生活では様々なことを教えて頂きました。遠征の宿泊の支度や衣類のたたみ方も丁寧に感心します。木練で食事を作ったり、家にいなくてもたくさんのご部活で教わってきます。

伝統ある西武台に入学して、沢山の方々とお会い、様々な経験をし成長できたことに感謝しております。毎日、健康で思いっきり体を動かして部活に励んでほしい気持ちでいっぱいです。

#### 鈴木 和代(19期生保護者)

西武台千葉高等学校バドミントン部創部 20 周年おめでとうございます。

ママさんの遊びから始まった、我が家のバドミントン！主人がはまり、そして長男が、西武台バドミントン部に入部した。練習で、家には寝に帰ってくるような状況でも、先輩、後輩の方たちと楽しい学生生活を送らせて頂きました。そして、バドミントンを知らなかった小学生の次女も、兄のすすめで、小学3年生の冬から、岩名ジュニアにお世話になり、一家5人の内4人が、バドミントンにかかわるようになりました。それからは、少しの勉強！多くの練習で、夕方から夜に、体育館

に通う毎日が始まりました。

小学校を卒業して、中学2年生から西武台中学にお世話になり、そして、この3月に西武台千葉高等学校を、卒業していきます。良き指導者である先生方、素晴らしい成績を残した多くの良き先輩たち、これからの西武台千葉高等学校を支えていく、ちから強い後輩達、兄妹で、通算11年もの間、バドミントン競技に打ち込み、野田市から、県、関東、そして全国総体（インターハイ）、国体、と力を出し、普通の高校生活では味わえない学生生活を送らせていただきました。

これからの、西武台千葉高等学校バドミントン部のご発展と、皆様のますますのご活躍を心からお祈りいたします。

二十周年、おめでとうございます。



#### 瀬間 澄子(19期生保護者)

先輩達の素晴らしい活躍には及びませんでした。その思いを後輩へ引き継ぐ事だけは出来たでしょうか？

浩徳が「バドミントンが上手になりたい」と西武台を選んだのは、今考えるとかなり無謀だったと思います。でも三年間続けられ、いろいろな面で成長したのを感じます。高瀬先生、稲田先生、戸邊先生、望月先生、ご指導いただきまして本当にありがとうございました。

それから、親子とも周りの方に恵まれた事を感謝しています。

野田インターハイの最終日、ジュニアでお世話になったコーチのお見舞いに、面会時間ギリギリ間に合いました。また一緒にやろうと言ってくださったのはかないませんでした。浩徳のバドミントンスタートでお世話になった方でした。

中学の同級生のお母さんに会うと「お互い高校でも最後まで部活が続けられてよかったね」と話しました。

同期の皆さんには支えてもらってありがとう。時にはケンカもしたでしょう。ダブルスを組んだ猪瀬君に、最後の試合の後「瀬間と組ませてもらってありがとうございました」と言われた時は、あまりに思いがけず嬉しかったです。

いろいろな行事や試合は保護者の皆様にお世話

になりました。あつという間の三年間、良い思い出になりました。これからも西武台を応援しています。

ありがとうございました。

---

#### 高井田 正美(21期生保護者)

西武台千葉高校バドミントン部に、入部してから早くも一年がたとうとしています。初めは、親も子も不安でいっぱいでした。母は、寝坊しないように目覚ましをセットし、寝ぼけ眼でお弁当を作り、亙は、必死に布団から起き上がり、寝ぼけ眼で朝の身支度・・・ほとんど言葉を交わさないまま、自転車ですら向かう亙の後ろ姿を見送り、一日が始まります。

春は風が、気持ちよく、夏は朝からムシ暑い。

秋はうす暗い空、冬の朝はまっくらで月が出てたりして・・・思わず二人で笑ってしまいました。

毎日の練習は、厳しく辛い事が多いと思います。筋肉痛でヒューヒュー言っている時もあります。それでも、がんばって続けられるのは、尊敬できる先生方と、信頼できる先輩や仲間達のおかげだと、感謝しております。

まだまだ、やるべき事はたくさんあります。色々な経験をして、歴史ある西武台千葉バドミントン部の一員として恥ずかしくないように、がんばってほしいと思います。私達、親も出来る限り協力させていただきたいと、思っておりますのでご指導の程、よろしくお願い致します。

---

### 祝 創部二十周年

#### 中村 康江(19期生保護者)

おめでとうございます。このような良き年に卒業とはとても光栄に思います。

西武台千葉高校バドミントン部での三年間中学をあわせて六年間本当にお世話になりました。思えば六年前バレーボールをやったかった光希ですが、バレーボール部が無くがっかりしていた所に担任だった望月先生に誘われてバドミントン部へかるい気持ちで入部したのですが、光希を待っていたのは軽いものではなかった。強い！部だったのです。ゼロからの出発です。小学生にも勝てず厳しい練習に耐えられないで、すぐにやめてしまうのかと思ったのですが、六年間続けることができました。それにはまったくの素人を相手に根気よく諦めずご指導下さった先生たちのおかげです。

夢のような関東大会出場！本当にいい思い出をたくさんありがとうございました。

高瀬先生を初め諸先生方 OB 先輩の方々感謝の気

持ちでいっぱいです。

そして、なにより光希と共に戦ってきてくれた仲間達！瀬間君 高橋君 猪瀬君本当にありがとうございます。これからの長い人生での糧になるでしょう。後輩の皆さんぜひ悲願の全国大会優勝を目指して頑張ってください。

---

#### 中村 きよ子(21期生保護者)

創部 20 週記念おめでとうございます。

歴史ある西武台バドミントン部に入部させて頂き有り難うございます。日々高瀬先生始め、稲田先生、戸邊先生と御指導頂きまして有り難うございます。

又、保護者の皆様には、日頃からいろいろとお世話になりまして感謝しております、有り難うございます。

一年近く西武台バドミントン部で試合や行事 etc に接し、何か温かくて、大きくて、これはひとえに高瀬先生(お父さん)のスケールの大きな愛の有る御指導を柱に諸先生、卒業生の皆さん、先輩の皆さん、後輩の皆さん、部活の皆さん、保護者の皆さん、それぞれがそれぞれの所でしっかりと仕事をし、頑張り、盛り立て、支え合って、回りを囲み、大家族で親戚一族のようです。アットホームな所有り、厳しく、優しく、揺ぎ無く、素晴らしいと感じております。

#### 紗也佳へ

何よりもバドミントンが大好きなあなたですから、今本当に幸せで充実している毎日だと思います。しかし、何分にもバドミントンとの出合いが遅く、西武台の部の皆さんとのレベルの差が余りにも大きく、現実の厳しさに直面していると思いますが、焦らず、怠けず、諦めず、1日1日を大切にコーチして頂ける事に感謝して、一步一步夢と希望に向かって進んで行って下さい。

---

#### 野口 教子(22期生保護者)

『俺、西武台中学に行ってバドミントンやりたい・・・』祐輔が突然言い出したのは、小学5年生の12月でした。まだバドミントンを始めて7ヶ月、川間ジュニアの練習にやっと付いていけるような状態の子が・・・ 私は『???何を言い出すんだこの子は・・・?』と思ったのでした。1ヶ月経っても意思は変わらないようで、今まで見た事もない熱心さで勉強するようになりました。1年後、なんとか合格はしたものの、『西武台のバドミントンについていけるのだろうか・・・?』と不安になりました。しかし、3月、川間ジュニアでの『6年生を送る会』で、温かく

見守ってくれた高瀬麻美監督、生田コーチ、保護者の方々、チームメイトの皆さんのお話を聞いている時、『きっと大丈夫だ！この子には、こんなに温かい場所がある。中学に行っても、辛い事や苦しい事があっても、ここに来れば羽を休められる。中学へ行っても頑張れるはずだ。』そう確信しました。

あれから3年、春には高校生になれそうです。きっと3年後も同じ事を思うはずです。『きっと大丈夫だ！これから社会に出て辛い事苦しいことがあっても、西武台のバドミントン部に来れば羽を休められる。こんなに温かい場所がある！』と。この先何十年とそんな場所であるために、私も保護者として協力し続けたいと思います。

創部20周年おめでとうございます！

### 堀内 真理子(20期生保護者)

創部20周年おめでとうございます。

私事になりますが、我が家と西武台千葉高校バドミントン部とのご縁について書かせていただくことで、お祝いと感謝の言葉といたします。

さて、私が初めて西武台千葉高校を訪れたのは、2002年の秋でした。関東小学生オープン大会の会場が学校で、当時4年生だった下の子が出場することになり保護者として応援に行きました。着いたときに「千葉県だけど、車だと意外と近いんだなあ」と思った記憶があります。(自宅埼玉県鷲宮町より約22Km)学校の印象としては、3Fの体育館にコートマットが敷かれていて、小学生の試合なのにすごい!!びっくりしたことと、学校内ですれ違う生徒の誰もが、元気に挨拶をしてくれる姿がとても清々しく感じたことを良く覚えています。

その頃から私の趣味である、インターネットを利用してのバド情報集めにも、熱が入り始めていました。西武台のホームページも見つけ、ちよくちよく覗くようになりました。なぜだかそのホームページにとってもひかれていました。今思えば、赤糸…。

子供が中3、夏も過ぎ受験シーズン到来。地元の県立高校への受験も決め、県立に落ちたら私立に行かないといけないと考えたとき、本人が選んだ私立は西武台でした。一度中学校から練習にお邪魔させてもらい、その時の印象が良かったようです。

そして県立高校受験、合格、西武台とは縁がないように思えた矢先に、県立高校のバド部の顧問の先生が異動することがわかりました。高校では、指導していただける先生の下で頑張りたいというのが子供の希望でした。そんな思いを叶えさせてやりたいという思いと、このまま県立高校に行か

せたら子供がだめになるのではと不安にもなりました。特にバドミントンが強いわけではありません。ただ、3年間目標をもって頑張れる高校生活を送らせたいと思いました。いろいろな方にご尽力をいただき転校することが出来、ただただ感謝の気持ちでいっぱいでした。

20周年という節目に20期生キャプテンという役割をいただき、拓人にはさらに西武台を盛り上げていってほしいです。

良き指導者、良き環境の中でバドミントンが出来ることに感謝し、親子共々頑張っていきたいと思います。高瀬先生、稲田先生をはじめとする諸先生方、バド部の皆様に感謝申し上げます。

### 三上ゆかり(21期生保護者)

「お母さん…私、西武台に行きたい…」

娘がそう言い出した小六の夏から四年半が過ぎました。

私の記憶が正しければ、その年のインターハイは牛久開催で芽美は田口監督の車に同乗させてもらい西武台の選手の試合を観戦しました。

冒頭の言葉は、その日の夜に彼女が言ったもの…。

「西武台の先輩達の様になりたい！」きっとそう思ったのでしょう。

夢や憧れ…目標を持ち、それに近づく為に努力する事はとても素晴らしい事だと思います。

今年も四月になればあの日の貴方の様に夢や憧れ、目標を持った新入生が来るでしょう…その新入生のお手本となる様に頑張ってください。母も頑張ります。

### 「20周年おめでとうございます。」

### 村瀬 裕一(22期生保護者)

「えっ、バドミントン？」……それが私の反応でした。

これは、息子のカイ(西武台中3年・バドミントン部在籍)が小学校3年生の時、それまでやらせていた少年野球をやめてバドミントンをやりたいと言ったからです。正直、私の中に「バドミントン」というスポーツはありませんでした。週末に家族で公園や庭先でやる「羽根つき」その程度の興味と知識です。最初は反対でした、野球がいやならサッカーをやれ、それがいやなら柔道をやれとなんの根拠もなく、ただ男なら男らしいスポーツをやらせようとしていたのです。それでも、「自分からやりたいと言ったんだからやらせてみようよ！」と言う妻の言葉で彼のバドミントンが始まりました。

事実喜んで練習に行く彼を見ていて、野球の時と



はちがうし、なにより目が輝いていました。妻もどんどんのめり込み、次の年には父母会の会長を2年も続けてやる様になったしです。こんなに一生懸命な2人を見ていてある日、練習をのぞきに行っておどろきました、男の子はたったの2人、女の子に混じって楽しそうにシャトルを打っているわが子、「なんじゃこりゃ〜」……………

あれから6年、今では自分も野田ジュニアの在籍、バドミントンの経験もないのにコーチをしています。バドミントンに対する偏見はもろなくなり、むしろこれほど未経験者との差がでるスポーツがあるのかと今では感心するしです。

ジュニアにしろ中高生にしろ、毎日の練習と努力の積み重ね、どんなスポーツでも共通する事ですが、こんなに拘束され休みもないのに、やめたいの疲れただの一言も言いません。個人差はあるにしろ、こういう気持ちにさせる先生方や先輩たち、そして一生懸命なお母さん方が作り上げた環境なのではないでしょうか！

そんな人達の中の一員としていられる事の喜びと幸せ、そして人として恥じぬ生き方をしなければと云う気持ち、「無責任に言わせて頂きます！」

20年といわず、30年50年と続く事を希望します。

#### 米山 久代(20期生保護者)

西武台千葉高校のバドミントンにお世話になって7年が過ぎようとしています。一日一日がとても短く感じられ、毎日が時間との戦いでした。一日が30時間くらいあったらいいのに……………と。子供に教えられ、励まされ、そして悩まされいろいろな事がありました。

でも子供の頑張っている姿を見ていると、自分もへこたれてはいけない、頑張らなきゃいけない、といつもそう思っていました。

しかし西武台で頑張っている姿を見られるのもあと一年。卒業後は自分が落ち込んだ時、壁にぶつかった時頑張らなきゃいけないという気持ちを奮い立たせてくれるものがなくなってしまうような気がします。

子供とともに頑張り、成長(私は成長してませんが)して来ましたが何かポツカリと穴があいてし

まうようです。

子供たちにとってはこれからが始まりであり、これまでに鍛えられた体力と精神力を自分の選んだ場所で発揮していってくれることと思います。西武台千葉高等学校で学んだこと、バドミントン部で教わったこと、必ず自分の力になっているはずです。この先進む道で苦しい事や辛い事どんな事があっても切り抜けて行ってほしいと思います。

#### 渡部 房江(21期生保護者)

西武台バドミントン創部20周年おめでとうございます。

バドミントンが好きで川間ジュニアに入り、西武台中・高とこの夏で7年目を迎えます。今まで続けることができたのは、川間ジュニアでの3年間のいろいろな経験で自信がついたことが大きいと思います。これも麻美さんやコーチをはじめ、川間ジュニアの皆さんと保護者の皆さん、さらに西武台生とOB・OGの皆さんのおかげと感謝しております。

西武台中学校に入ってから、試合などで思うような結果をなかなか出せず、苦しい時期もありましたが、周囲の皆さんに励まされながら頑張ってきました。バドミントンを通して多くの人達に出会えたことは、これからも私たちの支えであり続けると思っています。

高校生としての活動はあと2年あまりとなりました。高瀬先生をはじめ、諸先生、コーチの方々にはこれからもお世話になりますが、少しずつでも成長していけるよう、努力を重ねていこうと思っています。同時に、保護者として出来る限りの応援・協力をし、部を支えていきたいとも思っています。

これからも西武台バドミントン部の活躍を応援しています。

#### コラム5 心で走る(週刊バドミントン2003.6.16号より)

先日、中国電力男子マラソン油谷繁選手と佐藤敦之選手の記事を読み、深く感動した。油谷は工業高校卒業後入社、一方佐藤は東北の進学校から同社監督坂口と同じ早稲田大学に進学、箱根で活躍した選手である。「心で走る」が故中村監督が築いた早稲田大学競走部の伝統である。これは選手はむろん、指導者になったOBからもその心をたすきのようにつなげて今に活きている。高卒のたたき上げと一流大学のエリートはライバルとして無言のデッドヒートを繰り返す。しかし決して貶(けな)しはしない。油谷は「佐藤君の練習を見ていると、よくあそこまで自分を追い込めるなと思う」という。他方佐藤は「一緒に生活すると、自分が油谷さんに比べて劣っている面が見える」と話す。競技に情熱を傾け、真摯(しんし)に向き合う日常の生活が2人の対決の場である。「茶髪にするような選手はダメです」と言う。エスカレーター、エレベーターは使わない。2人の対抗心はチームの新しいエネルギーになった。

松本、皆川はかっこよかった。見た目はかっこよくない(失礼)。だけど、どんな人だって、彼女らを見て「強そう」だとは思わない。そのふたりはコートの中をおどるように、はしゃぐように走り回る。見ているこちらも楽しく、微笑ましくなる。「松つあんたちは楽しそうだよね!」と私に言ってくるひとは少くない。

だけど、私にはわかった。まるで息つぎなしのクローラ50Mを、何度も何度も繰り返しているような苦しさ伝わってきた。ふたりは「西武台」の選手だと思ふ。「心」で羽を追いかけるふたり、ライバル（好敵手）が結んだ小さい体の大きな花束に感激した。

#### コラム6 親バカ・バカ親（週刊パドミントン 2003.9.8号より）

石川県美川町で全国小学生ABC大会が開かれました。私の娘も出場することになり、旅行気分の母子には開いた口がふさがらない気分でした。聞くところによると、小学生では初めての民泊（みんぱく）を利用して選手を迎える事になっていたのです。娘などは大喜びでしたが、申し込んだ全国の小学生は、ほとんどが民泊拒否したのです。子供の体調管理が難しい、気をつかう、食事が合わない…。小さい街なので宿泊施設がないことを苦慮して考えた民泊は無視されたようです。結局、民泊をしたのは6選手だけ、そのうち2人は野田ジュニアでした。戻ったふたりは「よかった、よかった」の連発で、たった6選手だけの民泊は、あたたかく、一生忘れられない思い出になったようです。なにしろ友だちがたくさんできたこと、これは宝物かもしれません。

小学生のパドミントン専門サイトの掲示板に次のような事が、書いてありました

『会場にがっかり 投稿者：パドミン 投稿日：8月30日（土）23時37分12秒 スタッフの皆さんお疲れ様でした。少し小言を言いたいです。開会式もゆっくり見ることができず、B会場では他の選手の応援もままならない、このような会場を選んだ人にもう少し考えてもらいたい。時間を使い、お金を使い会社を休んで来たのにこのありさま。また、B会場では試合前にシャトルを打つのもだめ。初めての試合前は3分ぐらい打ち合いをさせてもいいのでは。決勝トーナメントでは短い時間ではあったがシャトルを打てるのになぜ…。コンビニも、食事をする場所もないところで全国大会開催は遠慮してもらいたい。付け加えると宿泊した旅館の食事が最低だったことも付け加えたい。』

この意見には賛同する方も多く、後に同じように不満を言っている方々がいました。お気持ちはわかりますが、子供に頭を下げてさせて気を使わせることも大切な教育で、「世の中は自分が中心ではない」ことを学び、そして他人（ひと）の心のありがたさを知る絶好のチャンスでもあります。その掲示板に、野田ジュニアの小林コーイチはこう書きました。

『美川のみなさんありがとう。投稿者：千葉県 α野田ジュニア 小林 投稿日：8月25日（月）23時11分51秒 石川のみなさん、大会役員の皆さん、ABC大会お疲れ様でした。特に、今回民泊でお世話になった美川ジュニアのみなさん、本当にありがとうございました。みなさんのおかげで、選手たちはのびのびの試合をすることができました。歓迎会や民泊先での交流など、いつもの試合先では味わえない、楽しく貴重な経験をさせて頂いたことにとっても感謝しています。西川さん、明習元さん、美川ジュニアのみなさん心温まる民泊ありがとうございました。よしえちゃん、ありさちゃん、かずきくんまた会おうね。今度は是非、野田でやりましょう。』

パドミントンをやっている私の娘に特に気をつけなくてはならないことは、みんなへのそれと同じです。「何のためにパドミントンをやっているのですか？」思いついたような気分にしてしまうのが「勝ち」です。だけどそこまでにきちんと学んで生きていければ、なお一層謙虚（けんきょ）になることを教えてくれるもの「勝ち」です。

『実るほど頭を垂（た）れる稲穂（いなほ）かな』

#### コラム7 卓球・勉強・卓球（週刊パドミントン2004.3号より）

私の人生の最も尊敬できる選手、指導者のひとり、ミスター卓球・荻村伊智朗氏の著書である、「卓球・勉強・卓球」（岩波ジュニア）のほんの一部を紹介しました。この本は、現在絶版なので手に入りませんが、笑いを忘れた日（2006卓球王国）というリメイク版があります。私は、卓球の技術論ばかりでなく、荻村さんの「密度の高い生き方」に感銘しています。是非、世界を目指す選手なら読むべきだと思います。

『1954年、ロンドンで行なわれた第21回世界卓球選手権大会で、私は男子シングルスに優勝することができました。そして、ベルリン、パリなどを転戦して帰国しました。帰国してから、日劇（銀座・有楽町にあった劇場、現在のマリオン）の地下のニュース映画劇場で私の映画をやっているというので見に行きました。』

そうしたら、当時の日本人のスポーツに対する感情をよくあらわしていると思うのですが、試合が終わって私がカップをもらうシーンが出てきたときに、観客がスクリーンに向かって拍手をはじめ、しかも立ち上がって拍手をするのです。私だけ坐っていたら、「こいつ、つめたい男だな」という感じでジロジロ見られるので、私も立ち上がって自分に拍手をしてしまいました。そんな思い出があります。

その映画館のくらのやみのなかで、「ああ勝ったんだ」ということ、「こんなに喜んでもらえるのだったらもっとがんばらなければいかな」という感じがしました。

私は山を登るのも好きです。3000メートル級の山を登って降りてきたときに振り返ると、「ああ、あの山に登ったんだ」という感激があります。そういう感激を日劇の地下で味わいました。

それがその後ずっと卓球をやるようになった一つの原因でもあると思います。』



『卓球部を作るー 代表が校長先生のところへ、「本格的な卓球台を持って卓球部をつくりたい」という話をしに行きました。校長は大いに困ったのです。敗戦直後の日本の公立高校は、お金がありませんでした。しかも、卓球部をつくっても与える部室がありません。体育館は雨が降ればザーザー水浸しになる体育館です。それで校長は「だめだ」といったのです。』

『なんとか部は誕生した、しかし卓球台は無かった。卓球台が買えるまでのあいだは、練習する場所がないので、近所の高等学校へ「こんちは、練習試合をやりましょう」といって行くわけです。たとえば、いまラグビーとか野球でも強くて有名な国学院久我山高校とか、荻窪高校とかに申し込みました。そうすると、「ああ、練習試合やりましょう」といってやらせてくれました。ところが、あまりしょっちゅう「こんちは、練習試合…」って行くものですから、「調べてみたら、あいつらの学校には卓球台がねえ、おれたちのところへきて練習している」ということがバレて、「もうくるな」なんていわれるようになったのです。そうなったところにやっと卓球台が買えたのです。』

『初めの練習試合ー いままで練習試合に行かせてもらっていたので、国学院久我山高校と練習試合をやりました。私がラストに出て、相手の学校のキャプテンに2対1で逆転勝ちして西高が勝ったのです。それで私はかなり有頂天になり「おれもまんざらずたものじゃないな」とニコニコしていたのです。つぎの日、練習が終わってから井の頭線の久我山駅の待合室に私が入っていったら、ちょうど久我高の卓球部の人たちが、やはり練習が終わって駅のプラットフォームに上がってきて、昨日の試合の話になりました。私がいるとは知らずに、「それにしても、〇〇さん。荻村というのはなかなかやりますね」といったのです。そうしたら、その私に負けたキャプテンが「いやあ、あそこの学校の体育館は明りがつかないので、夕べはもう暗くなって何も見えなかったからおれは負けたんだ。あんなんに負けるはずないよ」といっているのです。水をぶっかけられたようにハッとしました。「ああ、そうか。そういう自分は慣れているから勝つので、相手にはそういう理由があったのか」と。自分だけで有頂天になるものじゃないなという気持ちにさせられたことがあります。』

『大学生の選手に「荻村君、悪いことはいわないから卓球だけはやめなさい」と言われました。「第1に、君には素質がない。第2に、君は顔色もそんなによくないので、室内スポーツの卓球を一生懸命やると必ず肺病になって死ぬ」（中略）私は非常にショックを受けました。というのは、素質がないといわれたことが1つ。それから肺病の話なのです。父は、いくつかの病気が複合して亡くなったのですが、やっぱり結核もあつたのです。（中略）ドキッとしました。しかし、やめる気にはなぜかぜんぜんならなかったのです。それで、素質がないのだったら、とにかくもう努力しかないというふう思ったのが1つと、もう1つは、環境を絶対に清潔にしようと決心しました。（中略）雑巾がけをしようと思っ